

「戦禍に生きた演劇人たち」

演出家・八田元夫と「桜隊」の悲劇（堀川恵子）

第1章「青春の築地小劇場」は、「日本の近代演劇発祥の地と呼ばれた伝説の劇場が、かつて東京・築地にあった。」とはじまる。そして、その記念碑には「この劇場は、1924(大正13)年に建てられ、1945年3月の東京大空襲で焼けるまで新劇の灯をともし続けた。」と刻まれていると。

そもそも「新劇」とは？ということになるが、こう書かれている。

・古くからある芸能(歌舞伎や能)を「旧劇」と呼ぶとすれば、「新しい劇」、つまり歌舞伎や能ではない芝居のこと。

・その起源は、明治初期の自由民権運動で活躍した壮士たちによる世相批判を軸に生まれた「壮士芝居」で、「旧派」に対して「新派」を呼ばれる。

・さらに、欧米の近代演劇に触発され、歌舞伎でもなく壮士芝居でもなく、外国の戯曲を日本語で上演する活動がおこり、それが「新劇」として広まり、坪内逍遙の「文芸協会」と小山内薫の「自由劇場」によって芸能の世界に「新劇」というジャンルが確立されていく。

・その後、関東大震災後に小山内薫と「赤い伯爵」と言われた土方与志が開設した劇団築地小劇場の活動によって、大きく発展するが、やがてプロレタリア演劇運動が盛んになり、小山内の死後に築地小劇場も分裂し、のちに国家の弾圧を受ける。

本書に登場する「桜隊(さくらたい)」の前身は、薄田研二、徳川夢声、丸山定夫、藤原釜足により、1942年に結成された苦楽座。その解散(1944年)後、桜隊として戦争遂行を支援する「日本移動演劇連盟」に組み込まれ、広島に15人が疎開し、中国地方の慰問公演を受け持つ。原爆投下時、市内の宿舎兼事務所にいた丸山定夫ら9人は8月下旬までに全員死亡。原爆の被害を受けた唯一の職業劇団だ。



眠りからさめた 膨大な遺品は語る

これから始まる物語は、演出家八田元夫の眼を通して見えた、演劇界の足跡だ。戦禍の中に自由を奪われ、手足を縛られ、重い枷をはめられ、それでも芝居の世界に生き抜いた舞台人たちがいた。互いを深く愛し、戦争で離れ離れになってもなお、演じることを通じて心を通い合わせようとした俳優たちがいた。 (本文より)

著者は、演出家の八田元夫(はった もとお、1903年11月13日-1976年9月17日)と、その相棒の新劇の団十郎と言われた俳優の丸山定夫(まるやま さだお、1901年5月31日-1945年8月16日)、劇作家の三好十郎(みよし じゅうろう、1902年4月23日-1958年12月16日)など、演劇に人生を賭けた人々の熾烈なまでの生き方・人間模様を描くとともに、戦時下の検閲と弾圧と対峙する中での葛藤と選択を問い、「桜隊」の9人がなにゆえに死なねばならなかったのかを追求する。

かの時代、埋もれたままの事柄はいくらもある。いや、証拠隠滅によって消された事実の方が多いのだろう。「桜隊」のこともその一つだが、著者の執念と偶然が重なり、日の目を見るに至った。生き残った八田は、9人の仲間の消息を求めて広島市内を訪ね歩き、遺骨を収集するとともに、即死は免れたものの放射線に侵され、悲痛な死をとげていく仲間を為す術なく見送っていく。その役回りの苛酷さは言うまでもあるまい。かの「大逆事件」で殺された12人の家族を訪ね歩いた堺利彦と重なる。

戦争はあらゆるものを呑み込み、日常を非日常化し、特別な事態を恒常化し、人の命はもちろん、頭の中にも心の中にも手を突っ込み、監視下に置き、その自由を奪い、がんじがらめにしていくことがわかる。息をすることすらも苦しくなっていく中で、どう命を守り、生きていくのか、あまりにも辛すぎる。